

少年育成センターだより

令和5年12月15日

第29号

坂出市少年育成センター
坂出市久米町1-18-20
TEL 46-2777
FAX 46-7140

かわいい子には「体験」をさせよ

坂出市少年育成センター 所長 勝浦隆史

平素より、青少年の非行防止や健全育成活動及び少年育成センターに対するご理解と、ご協力をいただいておりますこと心からお礼申し上げます。

子どもたちは、この三年間、コロナ禍で制限された学校生活を送ることとなりました。学校行事や集団活動の縮小、給食は前を向いての黙食、マスクの着用や頻繁な手洗い、消毒。相手の表情が見えず十分な会話もままならない中でストレスの大きい状態が続いていたことでしょう。その後、5類に引き下げられ、今年度からは学校生活も日常を取り戻してきた中、今も心の不調を抱えている子どもは少なくないようです。やはり周囲の大人が子どもの様子の変化に早く気づき、話をよく聞いて、丁寧に関わっていくことが大切でしょう。

さて、多くの学校では、今年度から運動会や宿泊学習、修学旅行や文化祭など、様々な行事や活動がコロナ禍前のように実施されるようになりました。近年、子どもたちの自然体験やなかまとの遊び、地域活動の参加など様々な体験が減少し、学力や規範意識、体力等が低下していると言われていきます。そこで政府は、「かわいい子には体験を！」体験の風をおこそう」と令和4年6月に当時の文部科学大臣が「子供の体験活動推進宣言」を行い、豊かな体験活動を通じた青少年の健全育成を推進しています。自然の中で活動したり、動植物のお世話や家のお手伝い、地域の行事に参加したりす

るなど、友だちや家族、地域の方々と一緒に活動することで、自尊感情や共生感、意欲や関心が高まり、心の安定へとつながります。そして、子どもの頃の体験が豊富な人ほど、大人になってからのやる気や生きがい、モラルや人間関係能力などの資質・能力が高い傾向にあるということです。ただし、ただ体験させるだけでは得られる成果が少なかったり、意味を成さなかったりします。体験を通して得られる感情や気づき、学びこそが、子どもの成長を促す大きな糧になるということです。

児童文学作家の石井桃子さんが「子どもたちよ 子ども時代をしっかりと たのしんでください。おとなになってから 老人になってから あなたを支えてくれるのは、子ども時代の『あなた』です。」とおっしゃっています。私たち大人が率先して、小さい頃からの「質の高い体験」を、子どもたちにたくさん与えていきたいものです。

最後になりましたが、今回の作品募集には、たくさんの方が寄せられました。学校での健全育成への呼びかけとともに、熱心に作品作りに取り組んでくださった児童生徒の皆さんに感謝いたします。本当にありがとうございます。そのうちの優秀作品を掲載しましたので、ご覧頂ければ幸いです。

今後とも、将来の坂出市を担う青少年の成長を温かく見守っていただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。



優秀作品の展示

令和5年11月6日～11月10日
小学校の部



令和5年11月13日～11月17日
中学校・高校の部

坂出市役所 市民ロビー

	ポスター			標語			作文			合計
	応募	特選	入選	応募	特選	入選	応募	特選	入選	
小学校	84	6	20	176	9	19	76	4	12	336
中学校	51	5	11	111	5	10	42	3	8	204
高校	10	1	1	37	2	2	1	0	0	48
合計	145	12	32	324	16	31	119	7	20	588

応募総数。入賞者数

青少年の健全育成作文・特選作品

「ぼくのしあわせが おかあさんのしあわせ」

附属坂出小一年 安藤 蓮人

ぼくには、四さいと一さいと六かげつになつたばかりの三にんのいもうとがいます。ぼくは、いもうとたちがうまれるたびに、あかちゃんごんごんふうにおおきくなっていくのか、だんだんわかるようになっていきました。あかちゃんのおせわもできるように。たので、ぼくは、おかあさんをたすけます。それは、いもうとたちが、かわいくてだいすきで、いもうとたちのせいちようがうれしいからです。あと、おかあさんが、ぼくをたよってくれて、「ありがとう。」といってくれると、ぼくもしあわせなきもちになれるからです。ただ、きょうだいがあるたびに、おかあさんはとてもいそがしそう。ときどき、つかれたようなお話をしていると、ときどきあります。でも、おかあさんは、たのしいイベントをみつければ、かならずつれていってくれて、とてもたのしそうに、ぼくたちとあそんでくれます。そして、いっぱいしゃしんをとってくれます。ぼくは、あるとき、おかあさんに、「なんでそんなにしゃしんをとるの。」と、ききました。おかあさんは、「なんでかわかるかな。れんとたちは、おかあさんのたからものでしょ。れんとたちがたのしそうにわらっていると、おかあさんもしあわせ。それに、みんな、おおきくなったら、きょうのことをわすれるかもしれない。かぞくのおもいでをのこしたいからだよ。」と、へんじしてくれました。いつも、おかあさんが、いもうとたちばかりに、「かわいい。」といっていると、ときどき、「ぼくはかわいくないのかな。」

とおもうことがあったけれど、ちゃんとぼくのこと、すきでいてくれているんだなとおもって、とてもうれしかったです。

そんなおかあさんが、ときどきおこつていちゃばいやなかおをするときがあります。それは、ぼくたちが、けんかをしたり、だれかがおねじしたりするときではありません。ぼくたちが、てれびやげえむばかりみて、おかあさんのめをみて、はなしをきいていないときです。おこつてもいけるけれど、かなしそうなおにもみえます。てれびやげえむをぜんぶやめて、おかあさんといっばいはなしながら、なつやすみのしゆくだいをがんばったじかん、ぼくは、からだじゅうからパワーがみなぎっていました。おかあさんも、いつもよりいっばいほめてくれました。もつとがんばりたいとおもえました。ぼくは、おかあさんのわらったかおが、だいすきです。おかあさんがわらっているとき、ぼくもとてもたのしいきもちになれます。かぞくもみんなげんきになります。そして、もちろん、おとうさんやいもうとたちのえがおもだいすきです。かぞくですすじかん、いつもめとめではなして、みんながえがおでいられるとしあわせです。そして、みんなでわらいあった、かぞくとのたのしいおもいでを、ぼくは、どんどんふやしていきたいです。

青少年の健全育成作文・特選作品

「自分は変えられる」

東部小六年 西谷 日陽

「負けたくない。」

運動会のリレーの時、ぼくは、強く思った。五年生までのぼくは、人の悪口を言う

嫌な自分だった。友だちといっしょに遊びたいのにうまく言葉にできない。悪口を言つて、友だちをからかっていた。時には手を出してしまった時もある。友だちが本当はいやな気持ちになっているのは、分かっていた。でも、友だちとうまく仲よくできない、自分がいた。

六年になってぼくには、大事な友だちができた。その友だちのいいところは、他人を差別しないところで、ぼくは、そこが好きだ。ぼくにも優しくしてくれるし、他の人にもやさしい。いっしょに遊んでいて楽しい。その子と一緒に遊んでいるうちに、他の人にやさしくすることは、いいなあと思うようになった。ぼくは、人に悪口を言うてからかわないと決めた。話すときにこれを言ったら友だちはどう思うかなと、考えてから言うようにした。意識して続けると、だんだんと言わなくなった。すると友だちとのけんかがへった。いつの間にか人にイライラすることもへった。気付いたら、友だちがぼくに、声をかけてくれるようになった。友だちも増えたし、一緒に遊ぶことが多くなった。学校は楽しくなった。自分が変わると周りの人も変わると分かった。

六年生になってぼくには、一つ目標があった。運動会のリレーのメンバーになることだ。一年生の時には、走ったことがあるが、それからはなかった。今までは、別にえらばれなくてもよかったとあきらめている自分があった。でも、今年こそは、選ばれると思った。放課後校区内をじいちゃんに自転車と一緒に走ってもらった。いとこが走る練習をしているのを見てぼくも、練習したいなと思ったからだ。最初は、走ることに苦しくなって長いきよりも走れないし、タイムもおそかった。苦しんでも、手伝っ

てくれるじいちゃんや、自分より小さいところががんばっているすがたにぼくも、がんばろうと思えた。リレーのメンバーに選ばれた時は、よかったと思えた。選ばれてからもその練習を続けたし、毎日の朝練もがんばった。速くなったし、バトンパスもうまくなると練習は、楽しかった。運動会当日、ぼくの練習の成果は百パーセント出せた。結果はチームは二位だったし、運動会でも勝利をおさめた。ぼくは、今、変わり続ける自分をちよつとずつ好きになっている。

青少年の健全育成作文・特選作品

「できる人ができる時に すればいい」

加茂小六年 今川 翔太郎

明るい家庭は、温かい気持ちでいることだと思ふ。家族は、両親と兄と僕の四大家族だ。お父さんもお母さんも、朝早くから夜遅くまで仕事をしている。帰りが遅いので、晩ご飯はスーパのおかずだったり、洗たくだつていっばいになっている時がたまにある。土日は自分の野球の送り迎えや遠征について来てくれている。いつもの事だから、それが当たり前だと思つていた。

「お帰り。」学校から帰ってきたら、お母さんが家にいた。「仕事中に気分が悪くなつて病院に行ってきた。疲れたつて。」と言いながら晩ご飯を作ってくれていた。僕は「大丈夫？」と声をかけることしかできなかった。何かできることはないか、看病してあげたいと思つた。「晩ご飯は何でもいから、寝なよ。」「葉飲んだから大丈夫。お母さんの手作りが食べたいでしょ。」と笑いながら、僕の好きな料理を作ってくれた。

その日、お父さんが「みんなでできる事

を分担しよう。」と提案した。お父さんが朝ご飯担当、兄が洗たく物をたたんで、僕が片付ける。他にも、お風呂の掃除や玄関の整頓、それから家族で何ができるかたくさん話をした。

「ありがとう。学校や部活もあるから、できる時にすればいい。」とお母さんが言った。そうか、僕ができる時にすればいい。少し気持ちが楽になった。正直、決められると無理をしたり、ちょっと面倒くさいと思ったりしたかもしれない。

そういえば、兄は自分でご飯を作ったり、洗たく物をたたんだりしている。聞くと「お腹がすいていた時に、食べたい人が食べたい物を作るだけ。洗たくはたまっているなあと考えたからたたんでいるだけ。」と言った。おどろいたけれど、すごい事だと思った。兄は、自分でできる事を見つけて手伝いをしていた。手伝いをする、良かったことがたくさんある。お父さんもお母さんも喜んでくれる。

最初は、兄が洗たく物をたたんで、僕が片付けていたけど、洗たく物のたたみ方を色々覚えて、家族のためにできることが増えた。協力すると時間ができ、家族一緒にテレビを見たり会話をしたりする時間が、いつもより増えた。いつも普通にテレビを見たり会話をしたりしていたのだが、さらにその時間が増えたので、うれしく思った。手伝いは家族の一員として当たり前。できる事は何かを自分で考え、進んで取り組む事は、色々な事を身に付けるためのきっかけになる。僕ができる時にできる事をする。これからも無理せずに手伝いを続けようと思っている。

このような手伝いをする事で、笑顔の絶えない明るい家庭を作ることのきっかけ

になると僕は思う。

青少年の健全育成作文・特選作品

「言葉の力」

附属坂出小六年 新居 涼佳

私は、ちょうど一年前の五年生の夏休みから陸上を始めました。今は、短距離と長距離の両方に取り組んでいます。

長距離練習の初日、練習メニューを聞いて私は「うそでしょ？」と思ったのを覚えています。想像するだけでぞっとするほどの練習量だったからです。実際、想像をはるかに超えたしんどさでした。私は息をすのもしんどく座り込んでいます。コーチが、「これからや」と声をかけてくれました。その時、私は心の中で、「いやいや、もう無理。しんどすぎる」と身体も心も疲れ切っていました。しかし練習のたびに心が折れてしまいそうな私にコーチが一言二言必ず声をかけてくれます。「今日はこの前より走れとる」「次は力を抜いてみて」「足の運びが上手になったよ」などとアドバイスをくれます。その言葉が私の折れそうになった心に安心感を与えてくれて次もがんばろうという気持ちに変化させてくれていたことに気づきました。秋になると千メートルの記録会があり、初めてスタートラインに立ちました。コーチから「今までしっかり頑張るとる。大丈夫やで。元氣出していこう」と声をかけてもらい、そのおかげで少しだけリラックスすることができました。結果もっている力以上に速く走ることができていました。その時初めて、ハードな練習をこなしてがんばったからだと実感すること

ができました。コーチや家族、一緒に練習している仲間から「よかったね」「おめでと」と声をかけてもらいました。

冬には、マラソン大会や駅伝がありました。その時もコーチからアドバイスをもらいました。練習している私達ひとりひとりに声をかけてくれました。勇気や自信をもって大会に臨むことができました。秋の記録会前の不安な気持ちの自分とは明らかに変わっていました。その結果、優勝することができました。たくさんの方から「おめでと」の言葉をもらいました。このようなよい結果が得られたことは私一人が頑張ったのではなくコーチの日々の言葉、家族の励まし、仲間の応援があったからだと思います。いつも一人で頑張っているのではなく、周りの人たちが常に心寄りそい伴走してくれていることを忘れてはいけないと思いました。

「言葉」は、とてもすごい力をもっていると考えています。人が相手に情報を伝えるための手段の一つだけれど、ちょっとした言葉でも人の心はよい方にも悪い方にも動きます。伝える人の心に寄りそいながら言葉を使うことで本来の実力以上の力を発揮できると思います。私は将来、教師を目指しています。周りの子どもがよい方向に動くような言葉やメッセージを笑顔で発信し続けられる先生になりたいと思います。

青少年の健全育成作文・特選作品

「家族の時間」

白峰中一年 中村 龍馬

家族の時間をばくはどのぐらい大切にできているかを考えた。

中学生になり、ばくは携帯を買ってもらった。小学生のころ、両親や兄、何人かの友達は携帯を持っていてすごくうらやましかった。欲しくて仕方なかった携帯をやつと手に入れた。中学でできた友達と家に帰ってからの携帯でのやりとりは楽しくてたまらなかった。

学校であったことや、好きなゲームのこと、話題はつきない。学校生活の中だけでなく、家に帰ってから友達とつながっている気がした。気が付けば、ご飯やお風呂の時間以外は、常に自分の部屋で携帯をする。携帯で友達と話している方が楽しかった。そんなある日、ついに母が切れた。「一、すごい顔で怒り、携帯を没収された。最初はなんでだよと腹が立つほうが強かった。友達と話せなくなるじゃないか、みんな使っているのに、どうして自分だけが携帯を没収されないといけないんだという思いばかりが勝っていた。母に腹が立ち悔しくて仕方なかった。実際に携帯がないと、自分の部屋にいてもつまらない。話し相手もないし、することもない。暇だからテレビでも見ようとしてリビングに降りて行った。みんながいた。父や兄はテレビを見て話をしていたし、母は片付けをしたりゴソゴソしていた。ばくも、ソファアに座って一緒にテレビを見た。兄たちが、話題を振ってきた。何でもなし話だったけど、なんだか面白かった。気付くと母も笑っていた。さっきはめちゃくちゃ怒っていたのに、一緒に話をしていると、笑っていた。みんなが揃って笑っていた。その時ばくは気付いた。今までずっと携帯に夢中で気付かなかった会話の時間。家族で同じ空間にいて、同じものを共有す

る時間。ぼくは、この時間を放棄していった。大事な時間を失っていたことに気付いた。ぼくの生きる世界には、たくさんさんの時間がある。学校で勉強をする時間、部活で野球をする時間、友達と遊んだり話をしたりする時間。そして家で家族と過ごす時間。そのどの時間もぼくにはとても大事だ。順番なんてつけられない。だけど、一番ぼくの近くにある家族という世界を大事にしなければいけないと思った。家族みんなが笑い合い、話し合い、けんかもあるけれど穏やかな気持ちで過ごせる世界を大切にしたいといけない。家族はぼくの基ばんだから。

今回携帯を没収されたことで、ぼくが家族の時間を大切にできていなかったことに気付くことができた。携帯も友達も大切な便利だし友達と話すことは楽しいし好きだ。だけど、それだけに目を向けていてはだめなんだ。これからは、自分で自分にブレーキをかけて、携帯にとらわれず、家族の会話の時間を増やしていこうと思う。

青少年の健全育成作文・特選作品

「家族の新しい コミュニケーション手段」

白峰中一年 宮前 心晴

私の家族で、最近流行っていること、それは手話です。私の父と母が、手話教室に通い始め、習ってきたことを家でも使ってみせてくれます。まだ入門コースなので、指文字から始まり、数字や時計など日常的に使う簡単な言葉を覚えてきます。手話教室から帰ってくると、二人が復習がてら新しい手話を使うので、私たち家族も自然と見て、真似をしようと思います。一人が新し

い手話を知ると、また別の家族に使って見せようとし、それを見た父や母、または先に覚えた家族がほめたり間違いを指摘したりしながら、ワイワイやっています。

そもそも、両親が手話教室に通い始めたきっかけは、父の難聴です。父は、小学校の中学年の頃からだんだんと耳が聞こえにくくなったそうで、補聴器も使っています。母が言うには、父と母が結婚した頃よりもっと難聴が進んでおり、会話の時の声も大きくなってきているそうです。父は、聞こえにくくなっていくことで、人の話していることがよく分からず、何度も聞き直したり、間違って理解したりすることがあります。

時には、自分に言われていることが分からず、話しかけているのに、無視したりします。機嫌が悪い時は大変です。話しかける声が小さいと「聞こえない」と怒り、大きな声で言う、「そんな大きな声で言わないでええわ」と、また怒ります。父以外の家族で、父に関係のない話をしていても、「ぶつぶつ言わんとはつきり言え」と、勝手にかん違いして怒ることもあります。このような会話のすれ違いがもとで、父と母や兄がケンカになってしまうこともよくありました。そんな時の家の空気が、私はとても嫌でした。こんなすれ違いを少しでもなくしたいと、母が父を誘い、手話教室に行くようになりまし。今回、父が素直に教室に通うようになったのは、父のほうも家族との会話の問題を感じていたからなのかもしれない。

手話は、声を出さなくても、身ぶり手ぶりで相手と話ができます。私たち家族も、まずは指文字から覚えようとしています。手話表現の仕方が分からなくても、指文字が使えればなんとかなるようです。

私たち家族にとつて、手話を使うことは、現実的にスムーズなコミュニケーション手段になります。また、家族以外の人がいる所でひそひそ話をするように、こっそり手話や指文字を使うことで、なんとなく家族に連帯感が生まれます。これからも、家族で楽しみながら、いろいろな手話を覚え、使えるようになればいいと思います。

青少年の健全育成作文・特選作品

「ごみのない世の中」

東部中一年 塩崎 空音

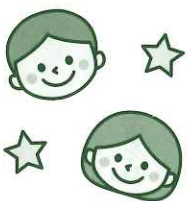
最近母が買い物から帰ってくると「今日もたくさんのごみがあった」とよく言うようになった。スーパーの駐車場にペットボトルや食べたあとのごみが大量に捨ててあるらしい。僕は、なぜごみ箱に捨てないんだろうといつも思う。誰かがごみを捨ててると自分も捨てていいと思ひ、そこがまるでごみ箱のように思えてくるのだろうか。こうしてポイ捨てはどんどん増え、深刻な問題になっていくのだと思う。たくさんのごみが捨てられてそれがどんどんたまっていくと、私達の住んでいる地球はどうなっていくのだろうか。

僕の住んでいる地域では、年に一回綾川の土手沿いの清そうを行っている。僕はそれに毎年母と参加している。初めは家の前の道だし、母に誘われてなげなく参加していた。一月の終わりで寒いし、朝早くからどうしてこんなことをするのか?と思っていたが、歩くたびにごみを見つけ、これは拾わなければと一生懸命になっている自分がいた。そして、最後にみんなのごみをまとめた時の袋の多さにとっても驚いた。

終わった後、きれいな道路を見ると、達成感でいっぱいになった。地域の人からも「ありがとう。」と言われてすごうれしかったし、ボランティアに参加してよかったと思った。一年に一回しかないのに、毎年ごみはたくさんあるのだ。もし、この清そう活動がなければこのごみはどうなってしまうのか。誰かが拾わなかったらごみだらけで、町はどんどん汚れていき、住めなくなっていくのではないかと考えたらぞっとした。自分が住んでいる所が汚なかったら、みなさんはどう思いますか。

ごみを捨てる人がいれば拾う人もいる。しかし、拾う人達があまりいなくなったらごみはどんどん増えていく。きれいな街にするためには、一人でも多くの方がごみを拾おうと思ひ、行動することが大事である。みんなでごみを拾うことで町がきれいになるだけでなく心もピカピカになり、自然と笑顔が増え、明るい世の中になっていくのではないだろうか。

そのためには、僕がまず積極的にボランティア活動に参加し、たくさんの人とコミュニケーションをとって、ごみ拾いの良さを伝えていきたい。そして、同じような考えの人が増えていくことで、この清そう活動の輪が、さまざまな地域や国で広がっていったらいいと思う。自分達の住んでいる所は自分達できれいにする。きれいな町で住んでいることをあたりまえだと思わず、自分でできることをしていきませんか。そして、この世の中が、ごみではなく笑顔があふれるようにするために、僕はこれからもさまざまな活動に参加していきたい。





東部中1年 井口 靖仁イリアス



坂出中1年 四角 華琉



坂出商業高1年 小西 歩実



青少年の健全育成ポスター・特選作品



坂出中3年 中元 ほのか



坂出中2年 三谷 怜央



附属坂出中2年 元木 碧泉



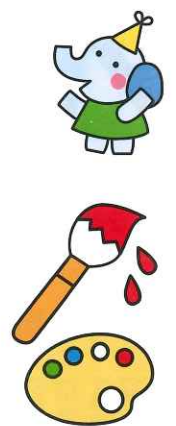
坂出小5年 藤田 航太郎



林田小2年 山本 滉士



東部小1年 川岸 史奈



附属坂出小5年 宇田 彩乃



林田小6年 猪熊 來南



東部小6年 櫻井 優歩



青少年の健全育成 標語・特選作品



ともだちに しないさせない いやなこと

坂出小二年 竹林 諒人

毎日の 「いつてらっしやい」 やる気ON

東部小二年 石川 愛梨

みつげるよ ともだちみんなの いいところ

林田小二年 野村 豪

助け合い 手から伝わる 心のクスリ

加茂小四年 澤田 蓮

万引きで なくす未来と みんなの信らい

加茂小四年 千田 哲士

家族の笑顔 明るくてらす エネルギー

坂出小五年 岩田 伊織

言わないよ 責任とれない その言葉

金山小五年 西川 悠人

もう消せない 書いた言葉と 心の痛み

川津小六年 矢野 由結

その言葉 笑顔の言葉に 変えようよ

附坂小六年 土居 煌枝

認め合い 支え合いから いじめゼロ

坂出中一年 大林 咲貴

「それいいの？」踏み込む自分に まず問いかけて

附坂中一年 辰巳 諒

スマートフォン 便利と危険が 紙一重

東部中二年 末包 創一朗

危ないよ スマホ見るより 周り見て

白峰中二年 大林 心

自制心 夢とからだを 守るもの

附坂中三年 黒木 遥加

消せないよ 君が送った その画像

坂工高一年 宮崎 裕也

キラキラの 大きな笑顔 広げよう

坂一高一年 山内 愛梨

ポスターの部 入選者

橋本 英渚 (東部小一年)	福家 愛菜 (附坂小五年)
小田 陸斗 (加茂小一年)	片岡 彩華 (坂出小六年)
田那部 輝 (加茂小一年)	遠藤 萌衣 (東部小六年)
浦田 悠叶 (附坂小一年)	三野 椿季 (松山小六年)
水口 明音 (加茂小二年)	中村 桜 (東部中一年)
山津 柑奈 (加茂小二年)	小川 留佳 (東部中一年)
横井 爽菜 (東部小三年)	山中 斗愛 (東部中一年)
武田 惇生 (東部小三年)	辰巳 諒 (附坂中一年)
武井陽菜乃 (加茂小三年)	北條 悠真 (附坂中一年)
山本 奏志 (松山小三年)	津田 葵空 (坂出中二年)
紺谷 芽衣 (坂出小四年)	大杉 梨華 (附坂中二年)
只野 葵 (東部小四年)	松岡 心音 (坂出中二年)
岡下 陽奏 (林田小四年)	能勢美美子 (坂出中二年)
山本 衣真 (附坂小四年)	平田 捷馬 (附坂中二年)
佐伯 莉衣 (東部小五年)	三木 陽生 (附坂中二年)
増田 光里 (松山小五年)	松山 果歩 (坂工高一年)

作文の部 入選者

山本 偲乃 (松山小一年)	藤田 紗奈 (坂出中二年)
横田 昂 (附坂小一年)	二場 心美 (坂出中二年)
山下 千晴 (川津小二年)	松浦 由奈 (東部中二年)
武村 侑佳 (東部小三年)	横川 瑞帆 (坂出中三年)
佐名木智稀 (川津小三年)	高木 莉菜 (白峰中三年)
松添 結衣 (松山小三年)	北山 聖竜 (白峰中三年)
山上 蒼心 (林田小四年)	高木 裕貴 (附坂中三年)
大林 璃沙 (川津小四年)	平岡 虎斗 (附坂中三年)
梅川 流碧 (東部小五年)	
香川 瑛音 (東部小六年)	
佐藤 碧音 (川津小六年)	
佐名木雅己 (川津小六年)	



標語の部 入選者

高木 日咲 (坂出小一年)	小林 穂花 (松山小六年)
小見山りんか (東部小一年)	高木 暖太 (坂出小六年)
吉田湊太郎 (東部小一年)	城金 香帆 (附坂小六年)
小田 陸斗 (加茂小一年)	山本 眞子 (坂出中一年)
糸川 翼 (川津小一年)	仲田有沙七 (附坂中一年)
伊関 真人 (東部小三年)	崎山 瑛都 (坂出中二年)
三谷 花 (東部小三年)	小川 真佳 (坂出中二年)
松野 禾音 (林田小三年)	高畠 卓 (附坂中二年)
三木 蓮人 (府中小三年)	湊 彩乃 (附坂中二年)
豊嶋 恭 (林田小四年)	香川 寧音 (東部中三年)
藤井 杏珠 (川津小四年)	宮崎 心和 (白峰中三年)
前田 芽咲 (金山小五年)	新宅 優恵 (瀬居中三年)
藏本 悠那 (川津小五年)	難波さくら (白峰中三年)
今井 零音 (川津小五年)	北条 理紗 (坂商高一年)
今池 勇翔 (金山小六年)	大谷 隼斗 (坂工高一年)
山上ひさき (林田小六年)	